
架空幻想

夜天の弓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

架空幻想

【Nコード】

N2017X

【作者名】

夜天の弓

【あらすじ】

例えば魔術。例えば超能力。例えば幽霊。これらは総じてオカルトは、長きに渡り伝わった一つの歴史であるにもかかわらず、信じる者はいなくなっていった。物語は唐突に、誰も彼も平等に巻き込まれる。始まりは日常から。幾つもの物語の待つ結末とは？

オカルトの証明

「万物全ての出来事は、科学で理論的に証明できる。」今や誰もがこう考えるようになったのは、何時からなのだろうか。例えば魔術。例えば超能力。例えば幽霊。これらは総じてオカルトは、長きに渡り伝わった一つの歴史であるにもかかわらず、信じる者はいなくなっていくた。

人間の行動には、常に理由が伴う。長い歴史の中で伝わったオカルト・・・架空の物を伝えたのではない。それは実際に存在し、そして伝えられたのだった。科学が発展していき物事には理屈が理論がついていった。才能が全てであるオカルト、結局自分自身が納得できるものでないと人は許容できなかった。いつしかオカルトは架空のものにされ、科学は発展していった。

多分、多くの人間たちは言うだろう。オカルトなんて存在しない・・・と。物事は全て科学で説明がつくと。すべての事象には必ず理由がつく。説明できないものがあつたとしても、まだ発見されていない科学である。きっとそう思う。だが、それは何もオカルトの否定何かではないのに・・・例えばここに一人の刺殺された死体があつたとしてしよう。我々は、その死体は生前自分で自分を刺したか、誰か別の人間が刺したかとしか考えない。これは理論的に証明できる。だがもしかしたら彼は、悪魔の使った魔法によってナイフで刺殺されたのかも知れない。例えば大きな災害が起きたとしてしよう。街の人たちの多くが亡くなり、行方不明となつた。だが、もしかしたら彼らのうちの何人かは、何か科学で説明できないことに巻き込まれ、災害とは無関係なのかも知れない。例えば戦場。戦争とは、お互いに殺し合う行動だ。戦場に死体は付き物だ。その死体ひとつひとつ全ての死因や死亡した状況等を把握できる訳がない。もしかしたら彼らの中には、オカルトに関わつて死亡した者達がいるかも知れない。状況証拠だけで説明してはいけないのだ。

ほら、この通り科学で証明できることが、オカルトを否定する証明にはならないのだ。

「悪魔なんていない。だって見たことなんてないから。」そう、悪魔がない理由。これが一番わかりやすい証明だと言えるが、これに対しては悪魔の証明で対抗する。いや、むしろ悪魔の存在の合否など、まったくのオカルト否定には繋がらない。悪魔はいないけど魔法はあるかもしれないし、先程説明した例で言えば、人間が魔法を使ったのかもしれない。悪魔は死後気化してしまう存在であり、もう絶滅した生物なのかもしれない。こと現在において例えばオカルトが絶滅していようとも、それはオカルト否定にはつながらないのだ。

先程からオカルトを無理矢理証明しているが、実際に魔法は、超能力は、幽霊は、さらにはオカルト事象は存在する。この世には科学で説明できないものが沢山あり、我々の生活にひどく密接している。多くの人はそれに気づかず一生を終えるが、それに深く関わっている人達もいるのだ。何故そんなものがあるのか？理由なんてない。ただそれがそこにそうやって存在してるだけなのだから。

オカルトの証明（後書き）

はじめまして。初投稿なので至らないところがありますが、よろしくお願ひします。

1話

その少年は、極々普通の少年だった。健康体そのもので、何か辛い過去があるわけでもなく、日常を謳歌していた。それは幸せな人生だし、彼自身もその事に不満などなかった。ただそれは退屈で怠慢な、とてもつまらない日々だと思っただけで。それは高校生にもなって、あまりにも幼稚で子供っぽい考えであった。

誰もが一度は考えたことだろう。「自分は特別で他人とは違う、物語でいうなら主人公なんだ。」・・・と。きっとそれは、多くの人間がいつしか思い浮かばなくなること。それは極々自然なことで、子供から大人になるうちに、現実を知っていくということなのだ。ただ彼は、それを知るのが遅かっただけ。

だから彼は未だに理想を追い求めている。・・・否、この言い方は違う。正しくは夢見てただろう。そうあつたらいい、そうだったらいいな。現実から目を背け、自分自身を特別視していた。ずっとずっと、彼は心の中でそう思っていた。誰かに言うわけでもなく、心のうちに秘めた思いだった。

それが誰かに知られたところで、笑われて終わるだけだろう。それは彼も十分承知だし、怠慢な日常のなかでそのようなことが起る訳がないとも気がついていた。でも、そう思っていたかった。「自分は特別なんだ。」ただそう夢見てただけ。何の努力もせず、特別になれる訳がないのに・・・

日常は繰り返す。毎日が才色のない単調な日々。・・・一見、変化があるように見えてもそれは、実のところ何も変わらないのだ。それが結論だった。だから思う、何か面白いことがおきないかなあ？と。

5月ともなると新入生気分は薄れ、新しい環境にも慣れてきた頃であろう。大半の人は、友人も出来て趣味のあうもの同士グループのようなものが出来る。部活の友達と一緒にいるもの、中学校の頃からの友人という者等々、多種多様だ。

ただ中には、新年度の4月には新しい環境への期待があり、やる気があるものの、その環境に適應できないでいる五月病の人たちもいる。

また4月は、頑張ろうと高い目標をたてていたが、5月になりダレてくる者、いきがったりし不良の真似事をするも、メツキが剥がれてくる時期でもある。GW明けとはそういう時期なのだ。

彼、井上 椋太は、そんな中でも別段変化なく普通の生活を送っていた。まあ、中学時代と違うことと言えば、部活動に入らなかったことくらいだろう。他に変化はなかった。結局義務教育が終わったからといって別段変化はないものなのだ。

きつとそれが大きな原因なんだろう。保育園から小学校に上がる時、大きな期待を胸に進学した。小学校から中学校に上がる時もまた同じだ。結局、大きな変化を感じなかったのだ彼は。それが自身のモチベーションの低さの原因でもあった。

だからだろうか、来週行われるクラスマッチに乗り気じゃないのは・・・

多くの人は、勝手すぎる、頭おかしいんじゃないの？とか思うだろうから口になど決して出さないが、かなりモチベーションが低い元々パンポンのように余り動かないものを選んだのだが、教師が「一位のクラスには賞品がでるぞ！」なんて言うもんだから、中学時代に入ってた部活であるサッカーにされてしまったのもまた、モチベーションが低い理由であった。

このようなイベントが、学校で行われるのはそう珍しいことではない。学校に慣れるため、交流を深めるため、様々な理由からイベントが開催される。

多くの人はイベントに乗り気だが、このようなイベントというのに乗り気じゃない人は結構いる。チーム戦というのは残酷だ。まず、実力の低いものは周りから叩かれる。叩かれないにしても、本人の気分的にも辛いものがあるだろう。それなのにもクラスに一人は、朝練がどうちやら言う人間がいる。決まってそう言う人間は、運動の出来る人だったりするし、出来ない人に対して「練習してないからだ」などと勝手なことを言う。

チーム戦でミスをする、周りの人に迷惑がかかる。総じて運動神経の悪い人たちにとってこのようなイベントは辛いものがある。

(・・・そもそもクラスの交流がどうちやらって言うが、人によっては確執が大きくなんじゃないかねえの?)

普通、自然と友人は増えていくものである。それなのにも関わらず、このようなイベントのせいで足を引っ張ってしまう人たちとの角質をつくってしまうのはどうなのか?というのが、井上の持論だった。

そもそもまだ5月だ。お互いのことを知らないのに、仲間割れを起こすようなイベントをしてどうするのだろうか。むしろ友人を作りづらくしてるんじゃないか。賞品云々でモチベーションをあげてるかもしれないが、それが逆にプレッシャーになってる人もいるのに・・・それが彼の意見だった。そう考えつつも、運動神経のいい彼にとっては、どうでもイイことなのだが、参加だけはしたくなかった。そう自分に言い訳していた。

「はぁ・・・めんどくさいなあ。」

まだこの時は思ってもいなかったのだが、あのような出来事に巻き込まれるなどと・・・

1話（後書き）

はじめましての方ははじめましてです。やっと今回本編を書きました。

前回の内容、「オカルトの証明」は、これが日常を書いた物語でないと思ってもらいたかったのが作成した理由です。本編には全く関係ありません。これから頑張っていこうと思うので、読んでくださったみなさん、よろしくお願いします。

>それは高校生にもなって、あまりにも幼稚で子供っぽい考えであつた。

ごめんなさい、作者の僕の方が幼稚で子供っぽい考え持っています。

2話

クラスマッチの練習が終わる頃にはもう、夜になっていた。いくら日が長くなってきたとはいえ、あれほど練習していたらそれは暗くなる。

「こんな時間までやる必要なんてねえのに・・・」

ついついそういう文句をいつてしまう。

「だよね！、こんな時間に歩いてると、この道は人通りがなくなる。。。。ここを歩くのは君くらいだ。」

.....え？

俺は、独りだったはずだ.....

その声は、酷く恐ろしい声だった。

恐怖で脚が震える。

「振り向くな」と自分の危険信号のようなものが告げる。体中が金縛りにあつたように動けない。あの声は一体何なんだ？体中から冷や汗が、滝のように出る。

勇気を出して振り返ってみる。「怖い」怖くて怖くてもう死にそうだ。・・・一体、そう決心してどのくらいの間そこに立ち尽くしていたんだろう。

何もない一本道、強いて言うなら真っ直ぐな道で、前と後ろはかなり見渡せるその道。・・・この道は、この時間帯になると、人通りがまったくと行っていいほどなくなる。この道の先に自分の家が

あるが、実を言うとそれ意外なものもない。だから、この道を利用する人は、かなり少ないのだ。

「……………い」

なぜこんなにも恐怖を感じるのだろう。いくら人通りがなくなるだけで、ここまで恐怖を感じる訳がない。

「……………い……………お……………どう……………」

まるで自分の中の隙間を通り、大切な部分を直接鷲掴みしたような声。

「おい……………つ……………い」

なんだったのだろうあれは。

「おいつて言ってるだろ!!!!!!」

「うわっ!!!!!!」

その叫び声で、軽くトリップ仕掛けていた心が戻ってきた。

「……………つはあ……………はあ……………」

息苦しい。まるでフルマラソンをしたあのように、息が切れている。体中が汗だくで、足はその場に立っているのが辛いほど震えている……………いったいどれほどの時間をトリップしていたのだろう。

「おい、大丈夫か？」

声をかけてくれたのは、どうやら女性のようだった。こんな時間に、誰かが歩いているのなんて驚くところだが、今日に限っては驚く余裕がなかった。

「まったくどうしたってんだ、偶然散歩で歩いてたら、立ち尽くして。顔色悪いぞ?」

「いや、大丈夫・・・ごめん心配かけた。」

「本当か?まったく・・・」

声をかけてくれた女性は、不機嫌そうにそう言った。

いったい何があったのかよくわからなかった。先程の声の主と、今話しかける人はおそらく別人だろう。なんとなくだが感覚でわかる。

・・・じゃあさっきのこえって?・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2017x/>

架空幻想

2011年11月7日08時15分発行